

修士論文（要旨）

2015年7月

新潟水俣病の被害高齢者から見た語り部活動への参加の動機づけと継続要因

指導 長田久雄 教授

老年学研究科

老年学専攻

213J6903

奥山陽子

Master's Thesis (Abstract)

July 2015

The Motivation of Participants and Factors of Continuation of the Storytelling Activities of
Elderly Victims of Niigata Minamata Disease (Mercury Poisoning)

Yoko Okuyama

213J6903

Master's Program in Gerontology

Graduate School of Gerontology

J.F. Oberin University

Thesis Supervisor Hisao Osada

目次

第1章 緒言	1
第1節 研究背景	1
第2節 先行研究	1
2-1 語り部活動	1
2-1-1 語り部活動の歴史	1
2-1-2 高齢者の語り部活動の先行研究	2
2-1-3 被爆者の語り部活動の先行研究	2
2-2 水俣市（熊本県）の資料館の語り部活動の実態の先行研究	3
2-3 新潟市の資料館の語り部活動の実態の先行研究	3
2-3-1 身体的影響が語り部活動に及ぼす影響	3
2-3-2 精神的・社会的影響が語り部活動に及ぼす影響	3
2-4 被害者の語り部活動の意義	3
2-5 先行研究の到達点と課題	3
第3節 研究目的と意義	4
3-1 研究目的	4
3-2 意義	4
第2章 研究方法	4
第1節 研究の手順	4
1 調査対象者	5
2 調査方法	5
1-3 分析方法	5
1-4 倫理的配慮	5
第3章 結果	5
第1節 分析対象者の概要	5
第2節 カテゴリー形成と結果図	6
2-1 ストーリーラインと結果図	6
2-2 カテゴリーと概念の詳細	7
2-2-1 語り部活動への参加の動機	7
2-2-2 語り部活動の継続要因	8
第4章 考察	12
第1節 語り部活動への参加の動機	12
第2節 語り部活動の継続要因	13

第3節 今後の課題	14
第5章 結論	14

[謝辞]

[文献]

[資料] 表-1 インタビューガイド	i
表-2 対象者の属性	ii
表-3 概念一覧表	iii
図-1 結果図	iv
分析ワークシート集	

第1章 緒言

1965年（昭和40年）、新潟県阿賀野川流域に新潟水俣病が発生してから、2015年で50年目となる。2001年、「新潟県立環境と人間のふれあい館」が開館し、被害高齢者の語り部の講話が同年から開催された。現在60歳代から80歳代の被害高齢者6名が県内の小中高校生や教員を対象に年間数十回講話が行われている。さらに、語り部活動は資料館に留まらず、現地調査の際での活動や国内外でも講演を行っている。

第2章 研究方法

新潟水俣病の「語り部」6名全員に対して半構造化面接を行った。分析は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を用いて行った。被害者高齢者を分析焦点者とし、分析テーマは「新潟水俣病の被害高齢者から観た語り部活動のプロセス」とした。

第3章 結果

被害高齢者は、「資料館からの働きかけ」によって、資料館の目玉になる語り部活動に参加することを決心する。〈語り部活動への使命感〉は、「二度と繰り返さないように」「亡くなった親や同じ症状で苦しむ兄弟」「亡くなった親や同じ症状で苦しむ兄弟」「被害を語らないと後世の人が賢くならない」である。「自分の家族の恥を晒す辛さ」「水俣病であることを恥じる」「認定や補償金をもらうことへの後ろめたさ」の家に対する責任感や罪悪感が〈語り部活動をすることへのためらい〉となる。この〈語り部活動への使命感〉と〈語り部活動をすることへのためらい〉の間で当事者の心の葛藤があり、決心するまでの苦悩の時間が存在する。〈語り部活動への使命感〉と「反対せず支えていてくれる家族」【語り部活動への参加の動機】となる。必要性に迫られて始めた語り部活動をする中での変化の中では、最初は〈語り部活動の難しさを感じる〉。例えば、「上手に喋れない」「居眠りやお喋りで辞めたくなる」「記憶力の衰退」「生徒の集中力は短い」と不安や緊張感があった。しかし、語り部活動は、〈支援によって続けられる〉。「聴講者の手紙やレポートで励まされる」や、「教師の理解や熱意によってかわる」で表明されるように、聴講している子ども達の反応や支援と教師の取り組みによって勇気付けられている。また、「資料館職員は助け舟」や「資料館は楽しいふれあいの場所」の概念で示されるように、資料館の技術的・精神的な支援によって、語る自信がついてきた。さらに、阿賀野患者会での「患者会でお互いに助け合う」や活動に「反対せずささえてくれている家族」の精神的支援で自信へと繋がった。これらの反応や支援が【語り部活動は継続要因】となり、二つの変化をもたらした。一つは〈内面的に自分自身が変化する〉、すなわち「偏見・差別が和らいできた」「自分の名前や顔が出せるようになった」「生の声を聞くことは何者にも勝る」「自信や知恵が増えて行く」である。二つ目は〈語り部活動の外面的変化〉として、「申請患者が増加し、和解が進んできた」と変化を感じている。さらに、「公害病の語り部同士との交流」によって〈語り部活動の交流〉という外面的変化も見られた。

第4章 考察

【語り部活動への参加の動機】は、新潟水俣病の生活史から生まれた内面的要因と、「資料館からの働きかけ」という外的要因からなつたと考えられる。しかし、このような病気にかかる、「家」に対する責任感や罪悪感を持つ人が多いことが〈語り部活動をすることへのためらい〉で表明され、それが公で語る決心をするまでの心の葛藤となり、この活動を決心するまでの苦悩の時間であったと示唆する。そして、〈語り部活動への使命感〉から参加する決心をした被害高齢者を精神的に支援した「反対せず支えていてくれる家族」の存在が大きな要因となる。それは、何故高齢者になってから活動を始めるのかに関わることで「老人が子どもに教える」という高齢期の特徴があると考えられる。活動への参加当初から〈語り部活動の難しさ〉や不安を感じ、自信を持たず、最初は資料館の職員との対話形式にしたり、資料館職員に助けを求めたりしながら、講話を進めていった。また、語り部自身が勉強し、知識を積み重ね、語り方も工夫していた。このような努力や技術的支援だけでなく、講話を聞いた学生の反応や支援が大きな力となった。また、同じ苦悩を分け合った「阿賀野患者会でお互いに助け合ってきた」ことや「反対せず支えてくれている家族」もその要因である。つまり語り部本人たちの努力と支援が【語り部活動の継続】でき要因であると示唆される。

第5章 結論

【語り部活動への参加の動機】は、新潟水俣病の生活史から生まれた苦しみの内面的要因と、「資料館からの働きかけ」という外側から働く外面的要因によると考えられる。そして、〈語り部活動への使命感〉と〈語り部活動をすることへのためらい〉の間で葛藤があり、その罪悪感を感じていた被害高齢者を後押ししてくれたのは、「反対せず支えてくれている家族」である。また、家族（子ども達）が理解してくれた理由は、今まで苦しんできた親が社会的責任を果たし、新たな人生の段階の目的を見つけたことを尊重したからである。

【語り部活動の継続要因】は、最初は、〈語り部活動の難しさを感じ〉、不安と緊張にあふれていたが、本人達の努力と、家族、資料館、聴講者と教師、阿賀野患者会の〈支援によって続けられる〉。試行錯誤しながら、語り部活動は継続し変容していく。その変化には、〈内面的変化〉と〈外面的変化〉があり、〈内面的変化〉は「自分の名前や顔が出せるようになった」「生の声を聞くことは何者にも勝る」「自信や知恵がついてきた」と示唆している。〈外面的変化〉としては、「差別・偏見が和らいできた」「申請患者が増加し、和解が進んでいる」「公害病の語り部活動の交流」が行われようになったことが明らかになった。水俣病の症状を抱え、差別・偏見をいう社会的圧力を受けている公害被害者のである高齢者が何故語り部活動に参加することを決心したのかは、高齢期と大きく関わっている。また、その活動が継続できた理由は、高齢者の語る意義とそのプロセスに関係していると考察できる。

参考文献]

- 1) 新潟県福祉保健部生活衛生課『新潟水俣病のあらまし』新潟県、2012年.
- 2) 環境省環境保険部環境安全課『水銀規制に向けた国際的取り組み「水銀に関する水俣条約」について』環境省、2014.
- 3) 石井正巳『昔話と観光』三弥井書店、2012年.
- 4) 平岩近広『被爆アオギリと生きる一語り部・沼田鈴子の伝言』岩波書店、2013年.
- 5) 高野尚子・渥美公秀「語りによる阪神・淡路大震災の伝承に関する一考察—語り部と聞き手の協働想起に着目して」『ボランティア学研究』第8号、2007年.
- 6) 池田理知子『「公害」を伝えるメディアとしての役割と今後』科研、2012年.
- 7) 広井良典『ケア学—越境するケア—』医学書院、2010年.
- 8) 米山リサ『広島・記憶のポリティックス』岩波書店、2005.
- 9) 原田正純『いのちの旅—「水俣学」への軌跡』東京新聞出版局、2002年.
- 10) 原田正純・田尻 雅美「小児性・胎児性水俣病に関する臨床疫学的研究—メチル水銀汚染が胎児および用事に及ぼす影響に関する考察—」『社会関係研究』第14号、2009年.
- 11) 水俣市立水俣病資料館『水俣市立水俣病資料館開館20周年記念誌』熊本県、2012年.
- 12) 白川健一「新潟水俣病の臨床的ならびに疫学的研究」『精神神経学雑誌』第8号、1972.
- 13) 白川健一・広田紘一・神林敬一郎・椿忠雄「新潟水俣病の疫学と臨床」『神経進歩』第5号、1972年.
- 14) 松村幸子・二階堂一枝・篠原裕子・菅原京子・花岡晋平「行政で働く保健師の新潟水俣病に対する活動の検証」『新潟青陵大学紀要』第3号、2003年.
- 15) 水越鉄理・渡辺行雄・将積日出夫・麻生伸・浅井正嗣・犬飼賢也・高橋姿「新潟水俣病（有機水銀中毒症）の神経耳科学的長期追跡調査」『日耳鼻』第105号、2002年.
- 16) 岩田和雄「公害と眼—新潟水俣病と眼」『日本眼科学会雑誌』第10号、1972.
- 17) 斎藤恒・関川智子「新潟水俣病の診断と病理所見の検討」『社会医学研究』第14号、1996年.
- 18) 斎藤恒「新潟水俣病第2次控訴原告患者の実情」『医学評論』第88号、1990年.
- 19) 斎藤恒・萩野直路・旗野秀人「新潟水俣病患者と認定の問題」『公害研究』第3号、1981年.
- 20) 飯島伸子・船橋 晴俊『新潟水俣病問題*課題と被害の社会学』東新社、2006年.
- 21) 渡辺伸一「水俣病発生地域における差別と抑圧の論理—新潟水俣病を中心に—」『環境社会学研究』第4号、1998年.
- 22) Timothy S. George. Minamata pollution and the struggle for democracy in postwar japan. *Harvard East Asian Monographs*, no.194. 1997.
- 23) 関礼子『新潟水俣病をめぐる制度、表象、地域』東信堂、2003年.
- 24) 木下康仁『質的研究と記述の厚み—M-GTA・事例・エスノグラフィー—』弘文堂、2009年.

25) 神谷美恵子『生きがいについて』みすず書房、2004年.

26) ヴィクトール・E・克蘭ク池田香代子訳『夜と霧』みすず書房、2002年.

参考記事：西日本新聞、2013年10月10日